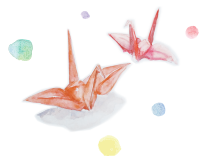


# 大相撲に学ぶ、伝統を担う者の役割

2021年7月の大相撲名古屋場所は、第69代横綱白鵬が全勝優勝。白鵬関の14日目と千秋楽の取り組みについて、「あきれてものが言えない」「歴代の横綱が守ってきた伝統や価値観が壊れてしまう」と方々から苦言を呈する声も相次ぐこととなりました。白鵬関の取組や立ち居振る舞いから、伝統を担う者の役割についての意見を書かせていただきます。



## 2 021年7月に行われた大相撲名古屋場所は、怪我から復帰した第69代横綱白鵬が全勝優勝を飾りました。6場所連続休場からの優勝は第48代横綱大鵬を抜いて、最長ブランクでの優勝でした。千秋楽の相手は大関照ノ富士。白鵬関と同じく14日目まで全勝しており、千秋楽での全勝同士の対戦は、2012年の名古屋場所以来、9年ぶりに実現しました。

一見すると、記録づくめの劇的な復活ですが、私は心から白鵬関の優勝を祝福することができませんでした。最初に違和感を覚えたのは、14日目の大関正代との取組です。仕切り線から大きく下がり、土俵際で仕切り、正代関を困惑させます。さらに強烈な張り手を何発も浴びせて白星を掴みました。「これが横綱の相撲か？」と疑問を持たずにはいられませんでした。

そして、迎えた千秋楽。立ち会いと同時に左手で照ノ富士関の目をくらませたと思っただら、サポーターの着いた右肘で顔面付近にエルボーを喰らわせました。最後に投げ飛ばした後は、倒れる照ノ富士関を前に

して豪快なガッツポーズをしながら、大声で雄叫びをあげていました。

相手へのリスペクトや横綱としての品格は全く感じられず、喜ばしい優勝のシーンを見ているにも関わらず、残念な気持ちと同時に、見苦しいとさえ感じました。解説の舞の海秀平さんがつぶやいた「そこまでして勝ちたいんでしょうか？」という言葉が全てを物語っているのではないのでしょうか。

## 確

かに歴代最多の優勝を誇る白鵬関の實力は本物でしょう。苦しいリハビリを乗り越えて復活を果たしたからこそ、喜びが爆発してしまったのかもしれません。しかし、柔道や剣道といった武道はもろろんのこと、日本ではどんなスポーツでも礼に始まり、礼に終わります。相手をリスペクトするというのは当たり前で教わることで。そして白鵬関は、日本に古来より神事として伝わる大相撲の横綱。相撲道という言葉があるように、強いのはもちろんのこと、それ以上に品格が求められる立場です。落ち着いてインタビューを受ける場面で

品格があるのは当たり前で、切羽詰まった場面での立ち居振る舞いにその人の本性が出てくると思います。今回の白鵬関の取組は、大相撲の歴史と伝統を破壊してしまっていると感じました。

相手や相撲の歴史や伝統、横綱という立場に対するリスペクトがあれば今回のような取組にはならなかったでしょう。白鵬関を實力はあっても、品格がない横綱にしてしまったのは、謙虚になるためのライバルの存在、そして何より品格ある横綱に育てられなかった指導者に原因があると思います。指導者が普段から何を伝えていのか。教わっている者の言動や立ち居振る舞いで全てばれてしまいます。

「これが歴史と伝統を背負う日本大相撲の大横綱！」よりも「勝利への執念、白鵬奇跡の復活！」が印象に残ってしまうことに危機感を感じた名古屋場所となりました。我々も、会社や家族など大きさも長さも人それぞれですが、歴史や伝統を背負っています。次の世代につなぐためにも、品格ある人物を目指していきましょう。

(株)キャリアコンサルティング 代表取締役社長 室館 勲  
Murodate Isao

2003年株式会社キャリアコンサルティングを設立。ブータン王国国立マネジメント大学など講演実績多数。全国社内木鶏経営者会 副会長。日台文化交流青少年カラシップ 審査員。ミス・ワールド・ジャパン審査員。著書に「夢を見て 夢を叶えて 夢になる」(致知出版社)、「まずは上司を勝たせなさい」(講談社)、「「応援される人」になりなさい」(ワック)がある。